

ホームレス問題を考える 7

グリーンコープはホームレス支援に

取り組めるまでに成熟しました

「生協の主体は組合員」
それを貫く

2006年、グリーンコープは生活再生事業を開始しました。「生協は商品を配達するもの」という社会の常識の中で、このような分野に踏み込んだグリーンコープの取り組みは社会の耳目を集め、その後の事業内容の質の高さから大きく評価されてきています。

今、グリーンコープは生活困窮者の自立支援施設「抱樸館福岡」の2010年5月開設をめざして、建設に着手しています。改めてそこに至るまでの足どりを振り返ってみます。

つていきました。

当時、日本ではすでに店舗生協が市民権を得ていたという背景があります。その場合の生協と組合員の関係は、「物品販売業者としての生協」と、「お客さんとしての組合員」で、組合員の主体性は希薄だったと言えます。

約40年前、食品公害などを背景に、全国の都市部を中心に一斉に共同購入型の生協が生まれました。何もないところから生協を生み出したのは、新しく「市民」として登場した女性たちでした。この新規の共同購入型生協は、生協と組合員という関係からみると、主体は生協ではなく組合員でした。女性たちは自らを生かす場として生協に関わ

らなりました。

カエルに進化するために

誕生した生協は当然事業として継続させていく必要があります。ところが、1970年代に設立された組合員数が数千から2万人くらいまでの小規模な生協は、やがて事業的にたちゆかなくなり、1988年のグリーンコープ結成は、それぞれがそのままでは生き延びていけないという状況下での大同団結でした。

その後も順風満帆だったわけではありません。合併をしてグリーンコープという生協をどのような生協にするか、抱えていた莫大な債務をどう解決するのかという命題が先決事項という状況でした。さらに1991年当時の日本の在宅主婦数は900万人、一方、

生協の共同購入組合員数は600万人に達するという飽和状態で、そのままでは発展は望めないところまで

きていました。当時のグリーンコープ連合専務行岡良治（現社会福祉法人グリーンコープ理事長）はこの苦境を次のようなたとえ話で語っていました。

「生協は轍に残された水の中で生きている魚に似ている。水（共同購入）から飛び出してしまえば死んでしまう。そうかと言って水の中にいれば、そのうち水が干上がって、やはり死んでしまう。生協は魚のままでは生き残れない。生協はせめて魚（魚類）からカエル（両生類）程度への進化が必要なのだ」と。

ワーカーズを多数、多様に誕生させる

カエルへと進化をとげるヒントはグリーンコープの「人間観」にありました。グリーンコープは人間を「生きる」という衝動に突き動かされている存在と捉えました。人間は例えば母親として、女として、地域の住人として、というようにさまざまな立場、位置、関係の中で精一杯生きています。そのみずみずしく生きる運動を生協運動という場において最大限に生かしたい、そのことがグリーンコープの真髄であ

ると考えてきました。1970年代に花開いた女性たちの「生きる運動」は、グリーンコープ結成後の一時期、自らを物品販売業者であるとする自己規制の状況の中で出口を見出せないでいました。そのような状況が経過する中、グリーンコープが大きく変革していくきっかけになったのが、1995年の「グリーンコープ福祉連帯基金」設立でした。そのあたりを契機に多数の「ワーカーズ」が誕生し、生きる運動の具現者として活動を開始して

と生きてきました。

2009年度現在グリーンコープのワーカーズ数3471人、組合員事務局数406人、理事・委員など組合員役員の数3349人。合わせると7226人になります。これは組合員40万人に対して、55人に1人がグリーンコープの内

にあって自らを生かす運動と働き方を展開しているということになります。人は生かされてはじめて他も生かすことができます。この多数のワーカーズの存在がホームレス支援へ向かうカギの一つと考えます。

「生命運動」が展開される場こそ「地域」です

グリーンコープ初代会長の故武田桂二朗さんは偉大な思想家であり、その実践

抱樸館福岡



抱樸館福岡完成予想図

「抱樸館福岡」とは、社会福祉法人グリーンコープがNPO法人北九州ホームレス支援機構の協力のもとで運営する施設です。「抱樸館」という名称は、北九州ホームレス支援機構が職業や住まいを失った人々を支援してきた施設の名を継承しています。

に生涯を捧げた人でした。グリーンコープは武田さんの「言葉」に何度も助けられました。グリーンコープの「安心・安全・こだわり」の商品や「環境」「平和」など、日々の取り組みを、

武田さんは「生命を育む」「食べもの運動」と位置付けたのです。その言葉を与えられることよって組合員は初めて、自分たちが実践していることが何なのかに

気がつかれました。それまでばらばらに散らばっていたように思えた「モノ」や「コト」が「生命運動」という一本の線上にすっとつながっているのを誰もが実感

することができたのです。また武田さんは、人間が暮らす「地域」を「生命活動が展開される空間的な場」と位置付けました。組合員

が自分の住む地域の中で、地域の人たちと共に生き生きと暮らすことが、地域を

本当に豊かにすることだとし、それをめざしました。今、グリーンコープはよう

やく武田さんが夢見た「地域」へ到達しようとしています。

生活再生事業はスタートからわずか3年間で1700人もの人たちの問題を解決しました。自殺者が毎年3万人を超える現代に一灯を掲げたと言えます。

同様に、80部屋を有する「抱樸館福岡」の開設、それは間違いなく私たちにとても希望となるものです。「抱樸館福岡」の運営で

協力関係となるNPO法人北九州ホームレス支援機構は、グリーンコープと同じ20年の活動の歴史を持ちます。しかし、20年前はお互いの活動は視界には入っていませんでした。今私たちの視界には多くの生活困窮者が、共に生きる生命

として見えはじめています。振り返ってみれば、グリーンコープはカエルになるほどの進化をとげることが

できました。生活再生事業や抱樸館福岡の取り組みはその実りだと言えます。



初代会長 故 武田桂二朗さん



組合員総会の様子 (旧ほくちく生協)